令和７年度 在外研究員 報告書

所　　属	人間学部　人間学科	職名・氏名	教授・加藤昌弘
調査研究題目	スコットランドのナショナリズムにおける大衆文化とメディア		
研　究　先　国	イギリス・スコットランド	研 究 機 関	スターリング大学
研　究　期　間	令和　　７年　　４月　　１日　～令和　７年　８月　31 日		

1）所属機関

1967 年に設置されたスターリング大学は、人口 10 万人程度の都市郊外に大規模なキャンパスを有する総合大学である（写真 1）。受入先の人文芸術学部は 2016 年の大規模改組の際に、人文科学系の学部学科を一つの学部に総合して組織された比較的新しい学部である。

写真 1　スターリング大学のキャンパス

スターリング大学は私がメディア研究コースの大学院修士課程を修了した母校であり、およそ 20 年ぶりの長期滞在となった。今回は名城大学と契約書を交わすかたちで公式に訪問研究員として学部に迎え入れられた。在籍料は請求されず、研究室の提供、図書館利用、印刷等の学部リソースの利用まで全て無償で提供された（写真 2）。滞在先も大学キャンパス内の寮となった。

(2) 研究

今回の在外研究がスタートしたタイミングで偶然 2 つの科研費が採択され、それら科研プロジェクトを優先的に推進する上で、主に三つの点で重要な進展があった。

写真 2　人文芸術学部の個人研究室

まず、ポピュラーカルチャー研究という面で、新たにコモンウェルス・ゲームズ（英連邦諸国で 4 年に 1 度開催するスポーツ大会）を研究計画に組み込んだ点である。共同研究者となった人文芸術学部のリチャード・ハイネス教授とは、

毎月開催される定例研究会のほか、スターリング大学の資料室が有するコモンウェルス・ゲームズの特別アーカイブを利用した研究で協働することになった。近郊のグラスゴーでは来年 2026 年にゲームズの開催が予定されている。

次に、カナダのノヴァスコシアとスコットランドの間の移民を通じた歴史的つながりに深く関与することになった点である（写真 3）。カナダ東海岸のノヴァスコシアは、ラテン語で文字通り「新しいスコットランド」を意味し、多くのスコットランド系移民を有する。しかし近年は先住民であるミクマクとのあいだの緊張関係と対話の試みがなされている。この加害と被害をめぐるアイデンティティのせめぎ合いを、本国であるスコットランドにおける難民や外国人移民に対する人種主義への反省と接続して研究した。スコットランドでは歴史学の国際会議で発表する機会も得られ、人的つながりの上でも今後の研究の展開において大いに有益であった。

写真 3　ノヴァスコシアガーデン

最後に、スコットランドにおけるポスト帝国主義の現在を学び、自らの研究計画の大きなフレームワークとして位置づけることにした点である。現在、市民ネットワークやミュージアムにおいて植民地主義を反省し、内在する人種主義を明らかにし、帝国主義を反省し乗り越えようとする試みがスコットランドで急速に進んでいる。現地専門家の感覚では、歴史的転機は 2020 年以降の BLM 運動の波及による国内での象徴的な事件にあるようだ。この一連の試みの意義と是非については帰国後も検討を続け、海外での学会発表が決定している。

(3) 生活

このように研究面では充実したものとなったが、全般的なイギリスの物価上昇は想像以上で、生活面では厳しかった。概ね物価の生活感覚は日本と比べて 2 倍であった。スターリング大学でも 20 年前に比べて大学院の学費は 4 倍に、大学寮の家賃も 3 倍以上に高騰している。こうした事情に鑑みると、今や日本からイギリスへの留学は外部資金の援助なしには現実的ではなく、格差の象徴でしかない。このまま日本が低賃金で留

め置かれ、両国間の格差が是正されなければ、日本では後進の研究者の育成に支障をきたすことは間違いなく、すでに危機は生じている。

今回はこうした肌感覚として海外事情を学ぶ機会ともなり、充実した在外研究となった。研究面においては渡航前の予想を大きく裏切る展開が複数あり、今後も継続的に渡英しコネクションを継続しながら研究していく基盤を築くことができたことが最大の成果であった。

（了）